

半 金 色 の 善 導

三 枝 樹 隆 善

大師善導の像が、半金色であることは多くの人が知っている。これは、宗祖法然の諸伝記が齊しく伝えるところであつて、すなわち、宗祖法然の一大靈感ともいうべき、靈夢の中に現わされたものと記している。まづたく、時と処を異にした二人の大師を対面せしめ、時空の制約を超越した靈的感應は、宗祖法然の内面的宗教生活を物語るものである。もし、これを伝記資料の価値判断において、そのまま、事実だということはできないとしても、しかし、これを宗祖法然の思想的立場よりすれば、真実として見ることができるであらう。

宗祖法然の名著『選択本願念仏集』は、その大部分が浄土三部經と大師善導の著述によつて、選択本願の念仏義を組織している。そして、その終りの十六章段においては、問答をもうけて、

「問曰華嚴・天台・真言・禪門・三論・法相諸師各造 浄土法門章疏 何不 依 彼等師 唯

用 善導一師 乎答曰彼等諸師各皆雖 造 浄土章疏 而不 以 浄土 為 宗 唯 以 聖道

而為 其宗 故不 依 彼等諸師 也善導和尚偏以 浄土 而為 宗而不 下 以 聖道 為

宗故偏依 善導一師 一

といい、また、浄土門の諸師は多くあることであるが、そのなかにおいて、

「何不 依 彼等諸師 唯用 善導一師 哉答曰此等諸師雖 宗 浄土 未 発 三昧 善導

和尚是三昧発得之人也於道既有其証故且用之

と述べているごとく、力をつくして偏へに善導一師による理由を説明している。そしてまた、
 「静以善導觀經疏者西方指南行者目足也然則西方行人必須珍敬矣就中每夜中有僧指授玄義僧者恐是彌陀応現爾者可謂此疏是彌陀伝説何況大唐相伝云善導是彌陀化身也爾者可謂又此文彌陀直説既云欲写者一如經法此言誠乎」

といつて、大師善導の觀經疏は阿彌陀仏の伝え説くところにして、阿彌陀仏の直説であるとし、そして大師善導は、シナの伝記を見ても阿彌陀仏の化身であるという。さらにまた、

「仰討本地者四十八願之法王也十劫正覺之唱有憑于念仏俯訪垂迹者專修念仏之導師也」

と述べて、大師善導を本迹不二の言葉をもつて讃歎しているのである。

このように宗祖法然は、その思想的立場を大師善導をもつて表明するものであつて、大師善導の指南がなかつたならば、宗祖法然の選択の原理も樹立しなかつたであらう。

宗祖法然の愛弟、勢觀房源智の見聞によるといわれる『一期物語』には、往生要集を先導として浄土門に入り、善導の釈を三たび読んで乱想の凡夫が、称名の行によつて往生すべき道理を体得したと伝えているが、往生要集によつて帰浄したにしても、念仏によつて決定の思を得たのは、ただに大師善導の『觀經疏』の指南である。『選択本願念仏集』にも述べられているように、善導の意によらなかつたら得生を得ずとする、宗祖法然には、血脈の相承も、面授の法式も不要であつたにちがいないが、『一期物語』は宗祖法然の源智に語られた言葉として、自分はすでに出離において決定したが、これを他に弘通したいという時機について思いわずら

つていた際に、夢の中において大師善導に對面することが出来た、そして大師善導は、汝が専修念仏を弘めるがゆえに、汝の前に来れりと告げられたと記している。そして、このときの大師善導の姿は、腰より下は金色であり、腰より上は常人のごとくであつたのである。後に諸伝記はこれを、夢定中の二祖對面の事實として伝え、その對面の場所まで相定しているのである。こころみに、宗祖法然の滅後比較的早い時期に成立したといわれる『夢感聖相記』をあげてみれば、

源空多年勸修念仏未嘗一日敢懈廢焉一夜夢有一大山南北悠遠峰頂至高其山西麓有一大河傍山出北流南浜畔渺茫不知涯際林樹繁茂莫知幾許予乃飛揚登於山腹遙視西嶺空間有紫雲一片去地可五丈意之何処有往生人現此瑞相須臾彼雲飛來頭上仰望孔雀鸚鵡等衆鳥出於雲中遊河浜此等衆鳥身無光明而昭耀無極翔飛復入雲中予為希有思少時彼雲北去覆隱山河復以為山東有往生人迎之既而須臾彼雲復至頭上漸大徧覆於一天下有高僧出於雲中往立吾前予即敬礼瞻仰尊容腰上半身尋常僧相腰下半身金色仏相予合掌低頭問曰師是何人答曰我是唐喜導也又問時去代異何以今來于此耶答曰汝能弘演專修念仏之道甚為希有吾為來証之又問曰專修念仏之人皆得往生即未答乃覺覺己聖容尙如在也

建久九年五月二日記之

源空

これがこのまま、事實だということができないとしても、宗祖法然の大師善導への思慕は、夢にもうつつにも、つねに對面せしめていたことであろう。大胡太郎実秀へつかわれたとい

う御返事に、

「善導はただの凡夫にはあらず、すなわち、阿彌陀仏の化身也。かの仏、我本願をひろめて、あまねく一切衆生にしらしめて、決定して往生せばかりに、かりに、凡夫の人とむまれて、善導和尚といわれ給う也。」

といい、さらにまた、『三部經大意』の觀經を釈する中においては、「阿彌陀如来、善導和尚となりて唐土に出ず」

などとあつて、ただの凡夫にあらず、かりに凡夫の人と生れてという、宗祖法然のまなこには、半金色となつて映じたにちがいない。二祖対面の事実がなきにせよ、宗祖法然が大師善導を現わすに、半金色をもつて示すことに何の不思議があろうか。大師善導が『往生礼讃』の中で、「彌陀身色如金山相好光明照十方」と、たからかに讃じているが、阿彌陀仏を金色とすることは、すでに阿彌陀仏を説く諸經典に出されるものとしても大師善導を阿彌陀仏の化身と仰ぐ宗祖法然において半金色をもつてその化身を現わすに、何のわずらいがあろうか。

このようにして、表現された大師善導の像は、上は黒染、人間としての善導は、垂迹の形を現わし、下は金色、超人間として的大師は、本地の姿を現じている。すなわち、さきにあげた『選択本願念仏集』に述べられる、本迹不二の形である。ことばを換えていえば、「仏凡間の一体」または「半神半人」の姿である。そしてこの半金色善導像の中にひそめられる、凡夫と如来は、浄土教の主体である。われわれはまた、この半金色善導像を論理は飛躍するが「南無阿彌陀仏」の姿として見ることもできるであらう。

そしてまた思うに、大師善導の宗教的根底にあるものは、「散善義」にしめされる「機法二

信」である。

「一者決定深信自身現是罪惡生死凡夫曠劫已來常沒常流轉無有出離之緣
二者決定深信彼阿彌陀仏四十八願攝授衆生無疑無慮乘彼願力定得往生
すなわち、前者は人、後者は如来を意味するものとするならば、この「二種深信」が、半金色
の雄姿にひめられているとも考え得られることであらう。

宗祖法然が表現する、この半金色善導像は、遺憾なく大師善導の人格、そのすべてを表示するものといえよう。